

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

ねはんえ
涅槃会

平成28年2月第2週放送

二月十五日はお釈迦さまのご命日めいにちです。多くの曹洞宗寺院では二月に入ると、お釈迦さまのご臨終りんじゆうの場面えがを描いた涅槃図ねはんずを掲げます。そして、今に伝わるお釈迦さまの最期さいごの教えを説いたお経こいとくをととなえ、その御遺徳しのをお偲びします。

掲げられた涅槃図を見てみますと、真っ白に変色した沙羅双樹さらそうじゆの下で、お釈迦さまは、頭を北に右脇を下にして、西向きに体を横たえていらっしゃいます。

縁えんを結んだ人々のみならず、さまざまな動植物に囲まれて、まさに旅立たんとするお釈迦さまは、最期の力を振り絞って、悲しみに打ちひしがれそうになっている者たちに語りかけます。

「この世の全てのものは一瞬いつしゆんも留まることなく移り変わっていくものであり、私はそのことわりに従って逝ゆくにすぎない。これからは自らみすかを抛り所よとしてそれぞれの生涯まっとを全うして行って欲しい。その歩みに際して、私の語った教えが抛り所となるはずである……。」と。

一見いっけん、周囲の者たちを突き放したようにも聞こえますが、お釈迦さまは、まず現実をしっかりと見据えよとおっしゃいます。そして同時に自らの残した教えもとに基づいて生きていく限り、お釈迦さまはこれからも共に歩み続けていく存在なのだと語りいらっしゃるので。その最期もとを看取らんとしていた者たちにとっては、どれ程、力づけられたことでしょうか。仏教ではこのみ教えみとに従って歩いていくことをぶつどう 仏道、ほとけさま 仏様の示された道と申します。

皆さんは、身近にいる大切な方を送るための祭壇さいだんをご覧になったことがあるでしょうか。上の段をそっと見上げたとき、そこには真っ白い一対いっついの飾り花が供えられていませんか？お釈迦さまがかつて体を横たえていた沙羅双樹さらそうじゆを模したものです。

その下に横たわっている大切な方は、二千五百年前のお釈迦さまの臨終の姿に重ねられるのです。私たちにはもう決して語りかけてくれることのないそのお姿まを目のあたりにしたとき、そこにその方と共に過ごした思い出の場面場面や、交わされた言葉が心に沸きあがってきます。お釈迦さまの言葉のように、私たちに語りかけてきます。それは今までも、またこれからも、きっと私たちを支え続けてくれるはずです。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

涅槃会とは、お釈迦さまの最期の教えを通して、亡き方々の姿に思いを馳^はせる機会でもあります。私たちの足元の、今の歩みを確かなものとする、そんなひと時でもありたいものです。

— 終 —